

要害の首塚・地王砦跡 発掘調査報告書

1989年3月

島根県 三刀屋町教育委員会

要害の首塚・地王谷跡発掘調査報告書正誤表

頁	行	誤	正
調査P1	18	入江工業	入沢工業
調査P2	8	入江工業	入沢工業
検査目次	10	B区上段縦斜面	B区上段縦斜面測量図
検査目次	11	B区下段縦斜面図	B区下段縦斜面測量図
	19	20~50cm	0.2~0.5m
	19	40~60cm	0.4~0.6m
	19	15~30cm	0.15~0.3m
	19	60cm	0.6m
図版1	下	要害の首塚完壊状況	要害の首塚完壊状況
図版2		要害の首塚完壊状況	要害の首塚完壊状況
図版4	下	地王谷跡発掘風景	地王谷跡発掘風景
図版9	上	B区上段縦斜面完壊状況	B区上段縦斜面完壊状況
図版9	下	B区下段縦斜面完壊状況	B区下段縦斜面完壊状況
図版10	上	A区出土遺物	A区検出遺物
図版10	下	空白	B区検出遺物
図版11	上	空白	C区検出遺物
図版11	下	D区出土遺物	D区検出遺物
図版12	下	(1. 鍾 2. 手斧 3. ノミ)	(上. ノミ 右下. 鍾 左下. 手斧)

例　　言

1. 本書は、三刀屋町教育委員会が三刀屋町土地開発公社の委託を受け実施した、地王住宅団地造成工事にともなう要害の首塚及び地王砦跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査を実施した遺跡及び地番は下記のとおりである。

要害の首塚　島根県飯石郡三刀屋町大字三刀屋 1,284 番地

地王砦跡　島根県飯石郡三刀屋町大字三刀屋 1,288 ~ 5 番地外

3. 要害の首塚

1) 調査体制は以下の通りである。

調査主体者　三刀屋町教育委員会

　　教育長　古瀬　明

調査指導員　宮沢　明　久（島根県教育庁文化課埋蔵文化財第1係長）

　　鳥谷　芳　雄（島根県教育庁文化課文化財保護主事）

　　蓮岡　法　暉（八雲村立八雲中学校教頭）

調査担当者　杉原　清　一（島根県文化財保護指導委員）

調査補助員　藤原　友　子（三刀屋町）

調査事務局　藤原　享　夫（三刀屋町教育委員会教育次長）

　　太田　昌　人（三刀屋町教育委員会社会教育係長）

　　福田　和　久（三刀屋町教育委員会社会教育係主任主事）

調査作業　森山　崇、陶山工務店、入江工業

調査協力　三刀屋町土地開発公社

調査期日　昭和63年7月24日～7月31日

2) 標高は、施工計画との共通性を考慮して工事用KBMを用いた。

3) 土色名及び標記は修正マンセル法（JIS）による『標準土色帳』を用いた。

4) 地形図の方位は磁北を示す。

4. 地王砦跡

1) 調査体制は以下の通りである。

調査主体者　三刀屋町教育委員会

　　教育長　古瀬　明（9月まで）若槻　喜　吉（10月から）

調査指導員　宮沢　明　久（島根県教育庁文化課埋蔵文化財第1係長）

　　鳥谷　芳　雄（島根県教育庁文化課文化財保護主事）

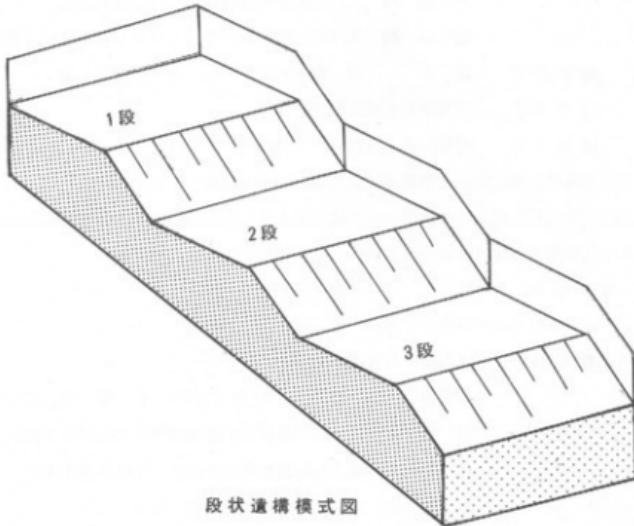
　　蓮岡　法　暉（八雲村立八雲中学校教頭）

杉原清一（島根県文化財保護指導委員）
調査担当者 石井 悠（松江市立第二中学校教諭）
大谷祐司（三刀屋町教育委員会臨時職員）
調査事務局 藤原享夫（三刀屋町教育委員会教育次長）
太田昌人（三刀屋町教育委員会社会教育係）
稲田和久（三刀屋町教育委員会社会教育係主任主事）
調査作業 加藤陽一・長羅忠・陶山工務店・都間土建・若槻工業・別所土建、
入江工業・若槻工務店・若槻メント工業・小畠土建

調査期間 昭和63年8月29日～9月1日、9月19日～11月30日

2) 発掘調査に際しては、三刀屋町土地開発公社の方々の御協力を得た。また、検出遺構及び遺物の性格については、渡辺貞幸（島根大学助教授）、川原和人・ト部吉博・内田律雄・松本岩雄・三宅博士・柳浦俊一（県教委文化課）、原俊二・林健亮の諸氏から助言、指導を賜った。記して謝意を表する。

5. 本文は、大田、杉原、石井、大谷が分担執筆し、遺物整理及び作図、製図、写真撮影は杉原、大谷が主に行ない、製図については、瀬田明子氏の協力を得た。
6. 地形図の方位は磁北を示す。遺構は、溝状遺構 S D、土坑 S K、柱穴状落ち込み P の略号を用いた。段状遺構の番号は下図のように上から1段、2段……と数えた。



目 次

序

I 調査に至る経緯 (太田) 1

II 位置と歴史的環境 (石井) 3

III 調査の概要

A 要害の首塚

1. はじめに (杉原) 5

2. 調査方法 (〃) 5

3. 調査結果 (〃) 6

4. まとめ (〃) 9

B 地王砦跡

1. 調査方法 (石井・大谷) 11

2. 調査結果 12

3. 遺構 22

4. 遺物 25

5. まとめ 26

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第2図 トレンチ設置図	6
第3図 要害の首塚遺構図	7
第4図 №3地形のトレンチ	8
第5図 №7地王砦跡トレンチ	9
第6図 調査区およびトレンチ配図	11
第7図 地王砦跡地形測量図および調査図	13~14
第8図 A区、B区土層図	17~18
第9図 C区、D区土層図	21
第10図 B区上段緩斜面	23
第11図 B区下段緩斜面図	24
第12図 土師質土器実測図	25
第13図 B区下段緩斜面出土鉄製品実測図	26

序

本町ではさきに「三刀屋城跡」を調査し報告集を二集にわたって作成していますが、三刀屋氏十四代の居城に関連すると思われる史跡は「地王砦跡」をはじめ広い範囲にわたって点在しています。「地王砦跡」については「雲陽軍実記」において、尼子、毛利の激戦地として登場しますが、まことにこの地に立って往時に想いを馳せるとき、三刀屋城主にとっていかに軍事上の要地であるかは筆略に全く疎い現代の私らにも数々背けるものがあります。

しかしながら本町が、町の活性化の一環として、30有余年の町政始まって以来の企画として、この地を住宅団地の造成に踏み切ったとき、例外なく当教育委員会として、開発と保存の狭間で苦悩することになりました。結果は「地王砦跡」取り壊しとなりましたが、幸いにして文化財行政への理解の高まりの中で、この期の山城発掘調査としてはある程度精密な調査の実施により、記録保存となりましたことは一つの慰めとなりました。

なお、この調査の過程で、本町の県指定文化財松本1号墳、松本3号墳とはば同時代に使用されたと思われる鉄製の鎌、のみ、手斧の出現という予期しない発見を見ました。そのことにより、西出雲地方の古代ロマンは本町を抜きにして決して語られないという物証を提示することになり、又、今後の本町郷土史研究において貴重な資料としての副産物を得ました。

それはそれとして、この調査報告書が、中世ないし戦国期における山城研究の発見に、一石でも投ずることを願ってやみません。

おわりに、この調査に当たって終始ご指導いただいた文化課の諸先生、杉原清一先生、石井 悠先生をはじめ関係の諸先生に深く感謝申し上げます。

平成元年3月

三刀屋町教育委員会教育長

若槻 喜吉

I 調査に至る経緯

今回、地主住宅団地計画関連の埋蔵文化財の発掘調査を、多くの方々の指導、協力を得て実施したところであるが、この間の経過について当初から担当した者ではなかったため不充分な点もあるが、記録しておきたい。

昭和61年9月、三刀原町役場建設課住宅係より教育委員会社会教育係に対し、当該住宅計画区域の範囲内での埋蔵文化財の分布状況の依頼を受けた。これに対し、付近に『要害の首塚』、「要害横穴」等の遺跡及び遺物散布地の存在を指摘したところである。

その後、開発計画担当課が、建設課から三刀原町土地開発公社へと移り、計画も現実的なものとなったが、その都度、開発協議関連の分布調査等においても当該事業区域内での埋蔵文化財の存在について指摘と指導を行なってきた。しかし、開発担当課の移行による資料等事務引継のロスに加えて、土地開発公社内部での担当者の交替による事務引継の不明確さから、埋蔵文化財の存在と重要性は認めつつも、適正な調査体制・手続きを経ないまま、一部発掘調査に及んだ次第である。

このことについては、土地開発公社側でも事の重大性を認識し、教育委員会では可能な範囲の調査体制を組みながら第1次の調査を昭和63年7月24日～31日まで、県文化財保護指導委員 杉原清一氏の手により「要害の首塚」とその付近について調査を行なった。その調査に先立って現地指導会を7月21日行なった。席上各調査指導員、調査員より周辺部の曲輪配置等から、開発予定区域内に「地王砦跡」の存在が指摘された。この砦跡は前2回の分布調査ではあまりに濃密な雲宗竹の竹林であったため、踏査不能とされた地域であったが、今回開発のための立木伐採により判明したものであった。

この後、町土地開発公社、県文化課等交えて協議する中で、開発か保存かの相反する命題の中で多くの意見がかわされた。特に「砦跡」というものの特性から、「地王砦の役」等、文献的な記述まで含めて、かつて町が経験したことのない苦悩と決断を迫られるに至った。そして開発部局や教育委員会部局はもとより、町行政の各方面に影響が波及する中で充分な調査と記録保存を前提に開発事業への着手を合意するに至った。

8月29日から1週間かけて「地王砦跡」の試掘を開始した。この調査は松江第二中学校の石井悠先生にお願いすることとなった。その報告をもとに、調査範囲の調査量の決定、調査体制の確立を急ぎ本調査を9月19日から行なった。調査担当は、前出の石井悠先生に加え、県教育文化財団から大谷祐司君を得て体制を整えて本調査に入った。これから12月初旬までの約2カ月半の間、気象条件等に恵まれず困難な点も多かったが、建設業協会等各方面の協力を得て一心の記録を保存し、検討会を経て今日に至った。

今回の発掘調査を終えて、本町にも若干の発掘調査事例があるものの、近隣に中世・砦跡関連の発掘文献が少ない現在、考察も困難な点等多數あったと考えられるが、精力的に調査及び調査指導にあたっていただいた。八雲中学校・蓮岡法暉先生、県文化財保護指導委員・杉原清一先生、松江第二中学校石井悠先生、県文化課・内藤仁男課長、同勝部昭補佐、埋蔵第一係宮沢明久係長、同島谷芳雄主事の皆さんには、特に感謝申し上げたい。又、本町は、松本古墳という古墳期のものとしては第1級の埋蔵文化財を財産としてもっており、今後、開発部局と、文化財に関して調和ある保存をめざして協力を続けていかなければならないと考えられるので、今回の関係部局はもとより、行政各方面にわたり、連絡体制、協議体制を一層密にはかっていきたいものである。

Ⅱ 位置と歴史的環境

本遺跡（三刀屋町大字三刀屋字地王 1288 の 5 他）は、三刀屋川と斐伊川が合流する地点から南西方向に約 3 km 進んだところの、三刀屋川南岸の低丘陵上に存在する。

両河川の合流地点から三刀屋川の上流に向って進むと、小平野がしばらく続く。このあたりは、三刀屋町内で最もまとまった平坦地をもつ穀倉地帯で、町の中心地となっている。また山陽への道、国道54号線が川に沿って貫通する交通の要衝でもある。

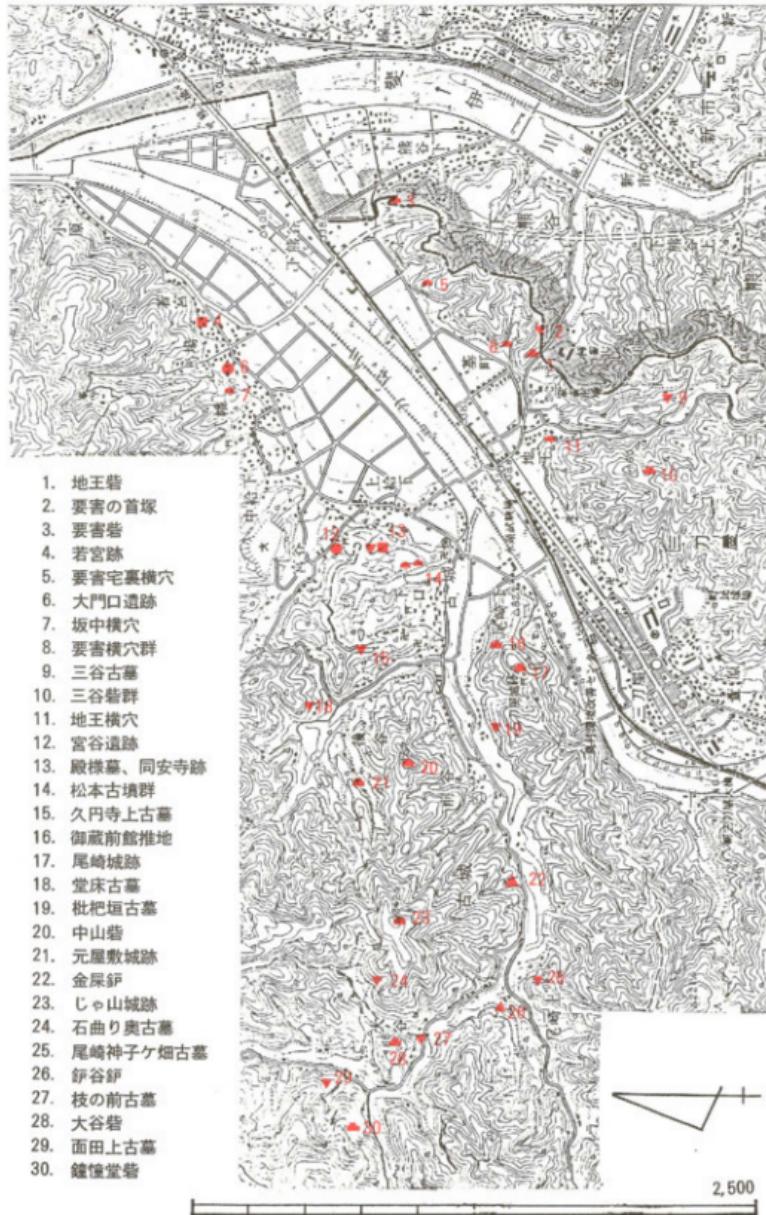
この平野に面した丘陵では、古墳や中世以降の遺跡が比較的集中してみられる。中世以前のものには城跡や砦跡と推定されるものが多く含まれ、これらは出雲と山陽を結ぶ主要街道を見おろす形で分布している。なかでも、この地に勢力を張った三刀屋氏（はじめ諏訪部と称す）の居城は、時代とともに本屋敷城跡 → 石丸城跡（じゃ山城跡） → 三刀屋城（尾崎の城跡）と移っていったと最近の調査や研究結果は指摘している。

こうした周辺の遺跡群は、中世の三刀屋を劈開させるものがある。当地方の中世における武将の栄枯盛衰を記した物語、「雲陽軍実記」や「陰徳太平記」によると、大内義隆は、天文11年（1542）の雲州攻めにあたって、10～11月（？）に三刀屋へ陣を移したという。『雲陽軍実記』には「義隆父子は三刀屋地王の峯の要害に御陣を居られ……」とある。また、前掲両書の別の記事をみると、永禄6年（1563）正月に、地王峯（陰徳太平記では地王峰）に行われた合戦のもよが伝えられている。

本遺跡は、細長い平野を見おろすような、標高約75～95 m（水田部からの比高約35～55 m）の低丘陵上に存在する。前出の地王峯（地王峰）は、このあたりにあったと考えられている。本遺跡の存在する丘陵は、現在県道神原 — 木次線で分断されているが、本遺跡の西南側に位置する三谷丘陵とつながっていたと考えられる。

＜参考文献＞

- 三刀屋町教育委員会「三刀屋城跡調査報告書Ⅰ」（昭和57年3月）
- 〃 「三刀屋城跡調査報告書Ⅱ」（昭和58年3月）
- 〃 「三刀屋城跡調査報告書Ⅲ」（昭和59年3月）
- 三刀屋城跡調査委員会「三刀屋氏とその城跡」（昭和60年6月）
- 三刀屋町教育委員会「三刀屋町の遺跡Ⅰ」（昭和63年1月）



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

III 調査の概要

A 要害の首塚

1. はじめに

調査対象である塚は、地元の口碑によって「要害の首塚」と呼び、昭和62年10月埋蔵文化財包蔵地に登載されたものである。

調査カードによると、当時の状況は、三方の稜線の集約する頂部に、基辺約4mのほぼ三角形をなす高さ約1.5mのマウンドを記録している。そして、付近は荒廃して原野化した細地で、当該マウンドも丈高い雑草に被われて明細は不明であるが、古来標樹とされていた老松は枯損し、その株の位置が判る程度であった。

要害の首塚は字要害（字地王に隣接）に所在し、県道稚原本木次線の地王峰の真上にある。口碑によると、中世、地王峰の戦いによる死者を弔ったものである。とし、この地に最も近い民家（木次町大字下能谷・杉原氏）の家号を「勝負迫」と言い、この塚を祀っている、との事である。

因みにこの合戦の様子を『雲陽軍実記』によると、梗概次のようである。

永禄6年（1563）1月13日、立原源太兵衛が先鋒として日井（斐伊）から川を渡って地王峰（字要害か）に上り、三刀屋家臣坂倉（田か）彦六と合戦した。手負いとなった源太兵衛は三谷山へと退いた。このとき双方合せて死者132人、手負い300人余。さらに攻手は三刀屋在家に火を放ち…と記している。

この要害の首塚はIに述べたように住宅団地予定地内に包含されることとなり、調査をまたずして中心部が破損を受けてしまった。しかし後、その残存部について及びその延長である尾根上についての文化財確認の調査を依頼された。

調査は昭和63年7月24日から7月31日まで行った。

2. 調査方法

調査は、要害の首塚については全面発掘、尾根上の分布確認は幅1mのトレンチによって行った。先ず刈払いのうちNo.1～No.7の図根点トラバースを設け、平板による地形測量から着手した（図省略）。地形測量は縮尺1:100、センター25cmとし、造構図及び断面図は1:20で記録した。標高は工事用KBMを準用した。（第2図）

またNo.7点以西の地王峰部分の地形測量は上記に準じて三刀屋町土地開発公社の手によって行った。（第7図）

3. 調査結果

1) 要害の首塚(第3図)

東西及び南の三方から尾根が集束する自然地形の高まり部を、地山まで削り出して三角錐台形に整形した塚であり、裾に狭いテラスを廻らし、北側のみは急峻な山腹の斜面へ収合している。

塚基部での法量は東西4.3m、南北4.2mで、ほぼ正三角形をなす。テラスは幅1.0~0.6mで西側が広い。東と西への尾根はこの削り出したテラスの下端で浅い溝によって区切られている。

マウンド頂部の破損は大きく、地山深くまで掘り返し削り去られていた。主体部はこの部位にあったと思われる。即ち、前年の踏査記録では塚高を約1.5mとしているが、現在残存する部分は高さ約50cmで、しかも約70%の面が失われ深く掘り返されている。

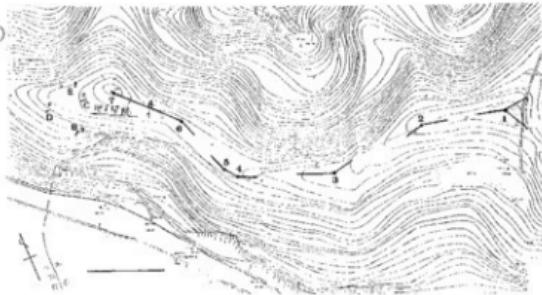
このような残存状況では主体部の様相、埋納壙の存否、祭祀状況等について一切知ることが出来なかった。しかし塚そのものが軍記に謂う132人の遺体を葬り得るスペースが有るとは考え難いものである。

塚の南側テラスからの尾根基部からほぼ直線的に東へ下降する、深く掘りくぼめた溝状構造は、南東方向下段の畠地を経てさらに下方の民家(家号勝負迫)へと続くもので、かつての通路とみられる。そしてこの溝状路は首塚の造営に際し、その掘削土で埋没していることから、通路としての機能は首塚以前のものと判断される。

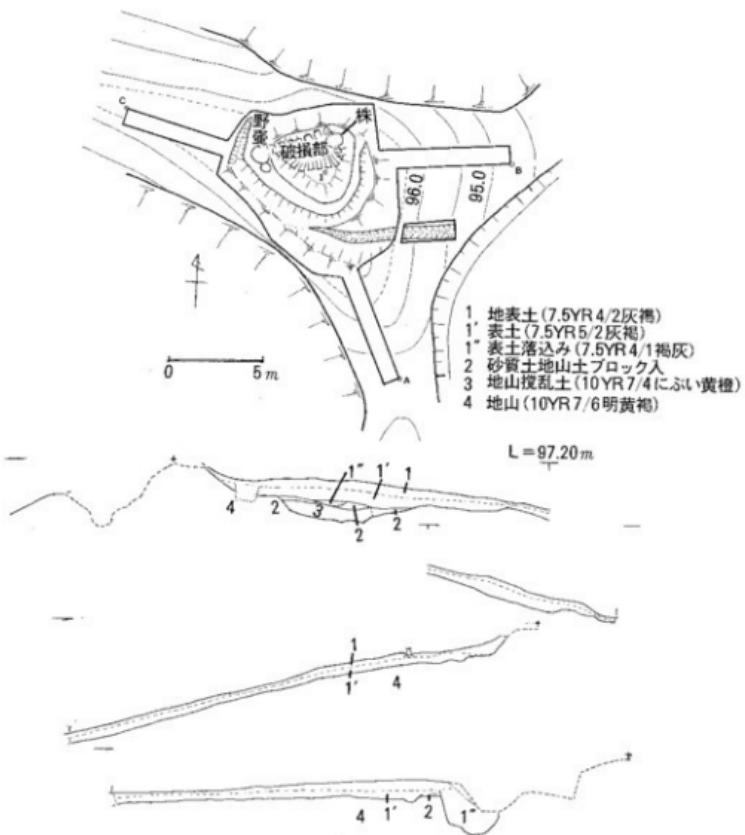
このほか、塚の西端部には現地表近くから穿った大小二つの円形ピットがあり、埋没されていた墨片から近世末~近代の肥料貯留のための“野壠”的跡と判明した。

また東端部には直径40~50cmほどの腐朽した松樹の直根の痕があり、かつて標樹であった老松の所在を示している。

この調査では、先の掘削攪乱され散乱していた土も逐一検討したが、調査対象である首塚に関与する遺物は全く検出されなかった。



第2図 トレンチ配置図



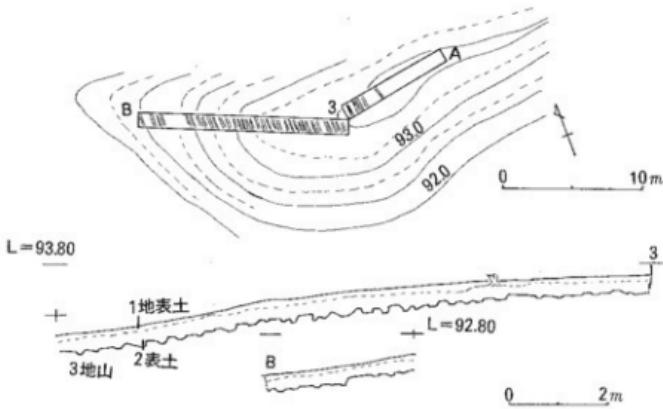
第3図 要害の首塚造構図

2) 尾根上の微高地形についての検討 (第4図)

上記“要害の首塚”(No. 1)から北へ地王苔跡(No. 7)まで約100 mのやや狭い尾根上には微高地形が5か所(No. 2～No. 6)が連続している。これを幅1 mのトレンチによって観察した。

土層断面でみると、地表から5～10 cmまでは地表の腐植土で、その下に腐植を含む地山土の風化した表土(耕土化したものも含む)が厚さ20 cm前後あって、花崗岩の風化した地山面を被っている。この地山面は概ね地表と平行するものであり、地形の高まりは地山面の高まりでもあった。

このうちNo. 3から北に下降するところには地山面に幅15～20 cmの浅い平底の溝が等高



第4図 No.3地形のトレンチ

線に沿って密に平行して掘り込まれ、洗濯板状をなしていた。これは畑耕作に伴う鍬での溝振りの痕跡と推察される。

このようにNo.2～No.6各点間は自然地形のままであると思われる状況で、またはほぼ全域にわたって地表面での畑作が行なわれたことも想像されるが、遺物等は全く検出されなかった。

3) 地王跡 (第5図)

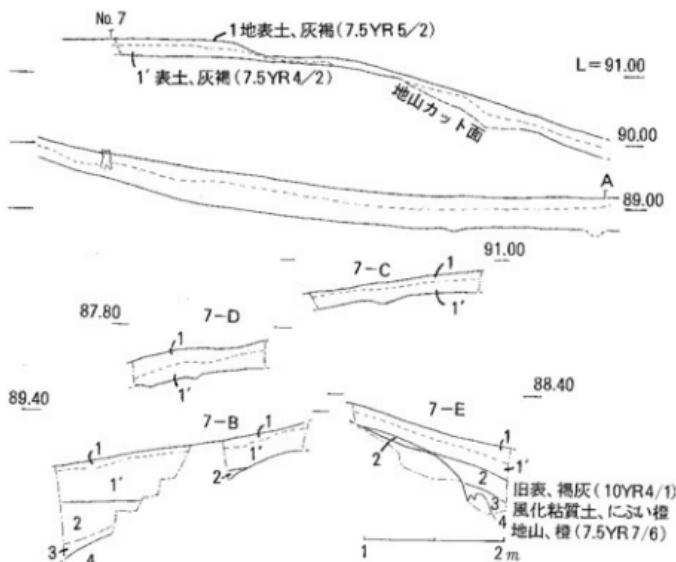
a) トレンチ調査

最頂部に設置したNo.7杭まで(A)及びB C D Eの補助トレンチによって若干の検討を行った。

No.6～No.7間には浅い掘り溝があり小路がこれに続いていた。これは表土で埋設しており、尾根越しの掘り込み通路で、畑地へ続くものであった。頂部から東への斜面には何らの変化もなく、自然地形のままであると思われた。

第2・第3段面では4か所(B～E)について土層の構成を検討した。尾根筋部分(C・D)は地山面に至る削平がなされて耕土となっており、直交する方向両側斜面(北及び南方向)では旧表土の上に削り出した土を盛って造成されており、地表は耕土となっていた。その盛土の際に段切り等の手法は認められなかった。

このように第2・第3段面とともに大きく削平された地形であったが、その地表面はすべて畑地として耕作されたものであり、砦としての庭面は確認出来なかった。またこれに伴う遺物も全く得られなかった。



第5図 No.7 地王砦跡トレンチ

b) 地形等について

この砦の丘腹部は急峻であり、削り出した切岸とみられる。眼下に宇古町があり三刀屋川に沿った連坦地が拡がり、川を隔てて三刀屋・尾崎城跡に対峙する。南西麓はかつての往還の地王跡でありさらに三谷砦へと続く。このように攻防ともに堡塁として好適な立地と言えよう。

丘頂付近を地形測量図等によってみると、西に向って下降する4段の削平段を主とし、それぞれ南と北に面して付帯する2~3段の狭い段地形が認められる。なお南西端部分は県道によって削りとられていて旧状は不明である。

4. まとめ

以上要害の首塚とその付近について調査の概要を記した。ここに若干の所見を挙げておく。

(1) 要害の首塚は盛土を主とする古墳の築造とは異なり、浅い掘切りによって区画した地山を削り出し整形したもので、塚は三角形プランで小テラスが付帯する。

この塚は、主体部が故意に破損された現状において、積極的に中世の所産と断定する資料は得られなかったが、掘りくぼめた通路の埋没や近世の野薙の埋没などの前後関係、さらに相当の樹令を思わせる標樹の伝承なども参考にすると、やはり中世末~近世初頭

の造営とみるのが妥当であろう。

また塚の形状は、例えば平安末期に描かれた草紙絵巻のそれを想起させるものである。

この塚は軍記に述べる死者 132 人の墓地とするにはあまりにも小さすぎて虚偽でありこれを追弔する供養の塚であったと思われるが、主体部の失なわれた現状ではこれも明確にし難い。

いずれにしても近隣地域に調査事例の稀れな中世の塚について、貴重な資料の一つとなるものであり、さらに事例をまって検討すべきものと言えよう。

(2) 尾根上の微高地形については、約 100 m をトレンチによって観察したが、格別の人為的加工は認められず、自然地形のまま地表においては畑耕作がなされていたものと判断される。

(3) 地王砦跡は 10 数年以前まで畠地であったこともあり、明確でない点が多いが、補助トレンチによってみると、特に縁辺部において旧表土を含む切り盛りの状況が窺がわれ、広い削平段が造られている。このとき格別に段切り等の手法は認められなかった。

地形・立地からして砦跡と推定されるが、試掘調査によってみると全面が畑耕土となっており、これによって郭面は把握することは出来なかった。

(1988.8 記)

<主な参考文献等>

雲陽誌（復刻本）

雲南軍実記（復刻本）

三刀屋町誌 S57

島根縣史六・七卷（復刻本）

中世の考古学 齋藤 忠編 名著出版 S58

中世城郭事典 村田修三編 新人物往来社 S62

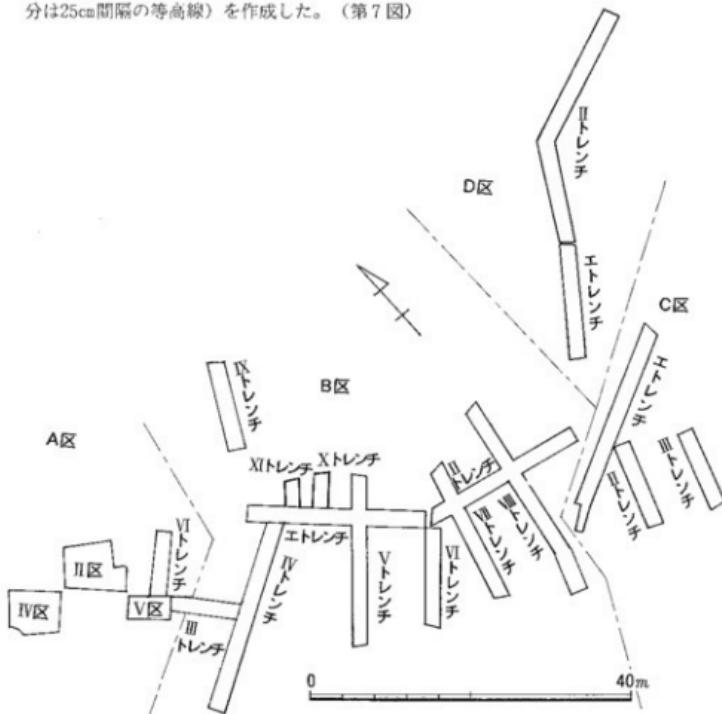
餓鬼草紙－東博蔵巻子－（便利堂復製）

B 地 王 碑 跡

1. 調 査 方 法

調査区は、丘陵の北西先端、平野部に最も近い調査区域をA区とし、A区の南東側から調査区の最頂部までB区、最頂部から南東側をC区、北東斜面をD区の4区に分割した。A区は2段の平坦面からなり下段を四分して、北部から右回りにA-I区、II区、III区、IV区とし、上段は南西半分をV区、北東をVI区とした。B区は尾根上の平坦面を上段、下段に分けて呼んだ。本遺跡は近・現代に畑の開墾のため大部分が削平されていると思われたので、A区のII区、IV区、V区は面的に、A区のVI区とB、C、D区は幅2mのトレンチを設定して発掘を行った。この部分的な発掘結果にもとづいて、必要に応じ調査面積を拡張するという方法をとった。トレンチ等の配置は、第6図のとおりである。

また、発掘と並行して、調査対象区域を縮尺200分の1の詳細な地形測量図（主要部分は25cm間隔の等高線）を作成した。（第7図）



第6図 調査区およびトレンチ配置図

2. 調査結果

1) A区(第7、8図)

A区はII区、IV区、V区を面的に発掘し、先端部とVI区をトレンチ発掘した。

a) A-II区

下段の緩斜面の北東側に設定した6m×5mの調査区である。上・下緩斜面の境になる崖曲を確認するため、南西側を1.5m×3mの範囲で拡張した。地山面で5~10°、崖面で55~70°の傾斜角を測る。表土層下は、茶褐色土が0.2~0.4mの厚さで堆積していた。

遺構・遺物は検出されなかった。

b) A-IV区

下段の緩斜面の南西側に設定した6m×5m調査区である。地山面で5~10°の傾斜角を測る。表土層下は、茶褐色土が0.3~0.4mの厚さで堆積し、東端は茶褐色土下に黒褐色土が堆積していた。

遺構・遺物は検出されなかった。

c) A-V区

上段の緩斜面の南西側に設定した5.5m×2.8mの調査区である。地山面で0~20°の傾斜角を測る。表土層下は茶褐色土が0.2~0.4mの厚さで堆積していた。

東壁の南端で溝状遺構を検出した。南壁の茶褐色土層から掘り込まれたピット状落ち込みから、明治以降と思われる鉄製品が出土した。

d) A-VIトレンチ

上段の緩斜面の北東側に尾根に直交する形で設定した幅2m長さ8mのトレンチである。地山面は南西側で傾斜角0~8°を測る比較的平坦な面であるが、北東側は傾斜角20~30°を測る急斜面となる。表土層下は、南西側で暗茶褐色土が0.8m前後の厚さで堆積し、北東側では暗茶褐色土が0.8m前後の厚さで堆積しその下部に黒褐色土が堆積していたが、北東隅ではその堆積が厚く地山面を検出できなかった。

遺構・遺物は検出されなかった。

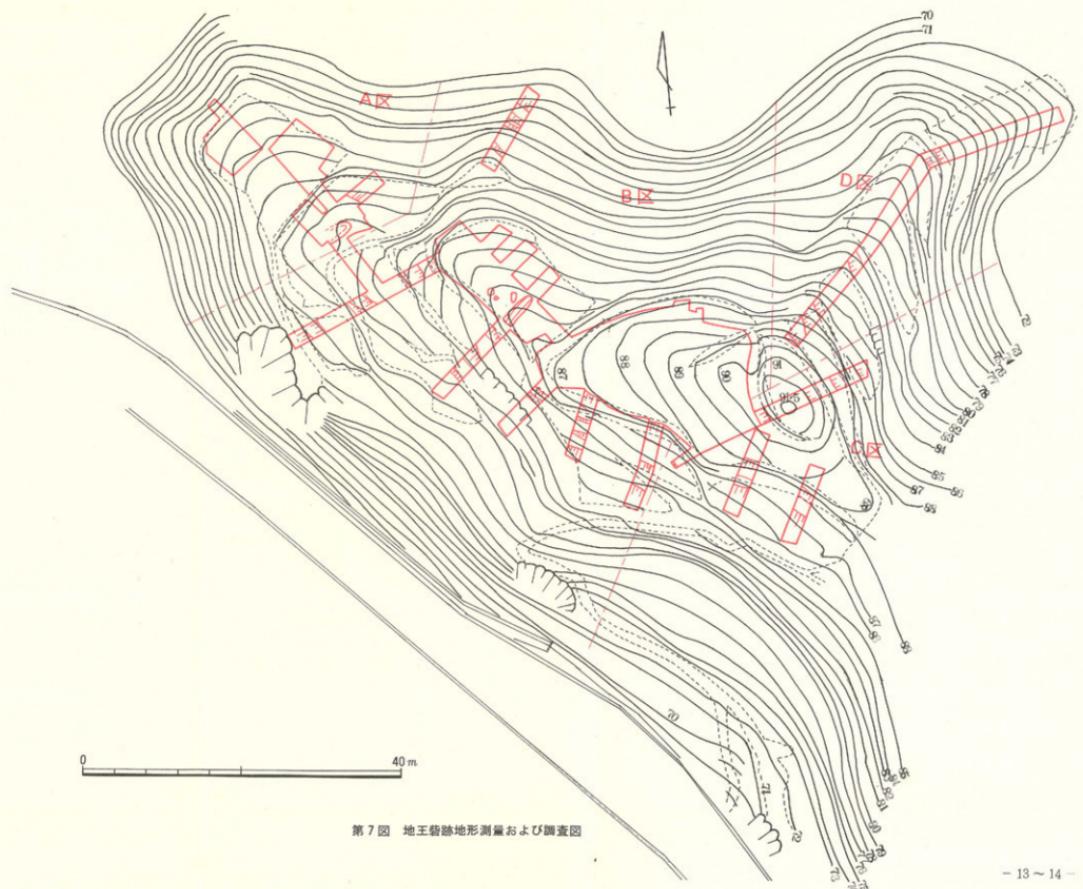
e) A-VIトレンチ拡張区

A-V区、B-IIIトレンチで検出した溝状遺構を確認するためにA-Vトレンチの南東側に設定した。

北東に向ってのびるSD-02を地山面で検出した。

地山面から近・現代の磁器片2、瓦片1を検出した。

f) A区全体のまとめ



第7図 地王砦跡地形測量および調査

表土層下の茶褐色土、暗茶褐色土は耕作土と思われ、地山面から検出した遺物から近世以降にA区の大部分は畑の開墾により地山面まで削平されていたと思われる。また黒褐色土は上方からの流入土と思われる。

2) B 区 (第7, 8図, 図版9, 10)

幅2mのトレンチを尾根上緩斜面に2本、南西斜面に6本、北東斜面に1本設定した。

a) B-I トレンチ

尾根上の上段の北西隅から下段の北西隅の緩斜面に設けた長さ約21mのトレンチである。地山面で5~10°上段と下段の境で40~50°の傾斜角を測る。トレンチの東壁から暗茶褐色土が0.2~0.3mの厚さで堆積し、東隅より15m付近から黒褐色土か暗褐色土の上に0.2~0.3mの厚さで堆積する。東隅より17m付近から暗褐色土が消え、厚さ0.3~0.4mの黒褐色土一層となる。

トレンチの東側から8m付近の地山面で、幅約0.7mの溝状遺構を検出した。遺物は、地山面から近・現代の陶磁器片2、表土中からトタン板を検出した。(図版10)

b) B-II トレンチ

B-I トレンチ南東側のB区上段の緩斜面に設けた長さ20mのトレンチである。地山面で5~10°の傾斜角を測る。暗茶褐色土が0.2~0.4m堆積する。

遺構は地山面でピット状落ち込み10を検出した。遺物は近・現代の陶磁器片1を検出した。

c) B-III区

A区と隣接する南西斜面に設けた長さ約9mのトレンチである。地山面で5~10°の傾斜角を測る。北西側で50°前後の傾斜角を測る段となる。表土層下は黒褐色土が0.4m前後の厚さで堆積し、北西側の下段で暗茶褐色土が0.6m前後の厚さで堆積していた。

遺構は検出されなかった。遺物は北西側下段の地山面の現代の磁器片1を検出した。

d) B-IV トレンチ

南西斜面に設けた長さ約24mのトレンチである。4段の段をなし、段の上面で5~25°斜面で30~50°の傾斜角を測る。1段目は、表土層下に黒茶褐色土が0.3~0.5mの厚さで堆積していたが、斜面で一部表土層下に地山が露出していた。2、3段目は、暗茶褐色土が0.2m前後の厚さで堆積していた。4段目は暗茶褐色土が0.3~0.5mの厚さで堆積し、その下部に黒褐色土が0.5~0.6mの厚さで堆積していた。

トレンチ北壁の南西側の表土層下0.3~0.4m付近で針金を巻いた杭の痕跡を検出した。他に遺構、遺物は検出されなかった。

e) B-V トレンチ

B-I トレンチで検出した溝状遺構S-D-01の範囲を確認するため、B-I トレンチ

に直交する形で尾根上下段の緩斜面の北東側から南西斜面に向って設けた長さ20.5mのトレンチである。南西斜面側は地山面で3段の段をなし、段の上面で5~25°、斜面で50~70°の傾斜角を測る。1段目は表土層下に暗茶褐色土が、2段目は茶褐色土が0.2~0.3mの厚さで堆積していた。3段目は表土下が地山となっていた。

B-1トレンチで確認したSD-01のプランを地山面で検出した。遺物はSD-01内から土師質土器1、1段目の斜面裾部の表土中から現代の磁器片1を検出した。

北東側は表土層下に暗茶褐色土が0.2~0.7mの厚さで堆積していた。地山面は10°前後北東隅で25°の傾斜角を測る。遺物は頂部のB-1トレンチ寄りの地山面で近世と思われる磁器片1を検出した。

f) B-VIトレンチ

B-Vの上段面の端から南西斜面にかけて設定した長さ約12mのトレンチである。表面観察で3段、地山面で4段の段をなし、段の上面で10~20°、斜面で35~50°の傾斜角を測る。1、2段目は暗茶褐色土、暗褐色土、暗茶黃褐色土が0.5~0.6mの厚さで堆積し、3、4段目は暗褐色土が0.2~0.5mの厚さで堆積していた。

1段目斜面の地山面から土師器片1、近・現代のすり鉢片1、2段目の地山面から砥石と思われる石1を検出した。

g) B-VIIトレンチ

B-IIトレンチに直交する形で上段緩斜面の北隅から南側斜面に設定した長さ約11.4mのトレンチである。南側は地山面で3段の段をなし、段の上で5~20°、斜面で40~50°の傾斜角を測る。1段目は暗茶褐色土が0.2~0.5mの厚さで、2、3段目は暗褐色土が0.2~0.3mの厚さで堆積していた。4段目は上から順に暗褐色土、茶褐色土、黒褐色土が0.6~1mの厚さで堆積していた。

3段目の地山直上から現代の陶器片1、4段目の地山面から碁石(黒)1を検出した。

トレンチの北側の緩斜面は0~20°の傾斜面を測り、暗茶褐色土が0.3~0.5mの厚さで堆積し、北隅で上から順に暗茶褐色土、黒褐色土が0.5~0.8mの厚さで堆積する。

h) B-VIIIトレンチ

表面観察で土壠状の高まりを確認したので、その高まりを精査するため設定したトレンチである。B-VIIトレンチの東側約6.4mの位置に並行して設定した長さ約15.4mのトレンチである。南側の斜面は表面観察で3段、地山面で4段の段をなし、各段の上面で0~15°斜面で40~50°の傾斜角を測る。表土下の堆積土は複雑な様相を呈し、1、2段目は暗茶褐色土を中心にして0.2~0.6mの厚さで、3、4段目は上から順に暗茶褐色土、黒茶褐色土が0.5m前後の厚さで堆積していた。南隅で黒茶褐色土と黒褐色土が1m前後の厚さで堆積していた。



第8図 A区、B区土層図

1段目の上面の地山面で土師器片1、斜面の地山面で近・現代の瓦片1、を検出した。

トレンチの北側は0~20°の傾斜角を測る。表土層下は暗茶褐色土が0.2~0.3mの厚さで、北隅は上から順に暗茶褐色土、黒褐色土が堆積していた。

トレンチの北隅で奈良時代の丹塗の土師器片1を検出した。

i) B-IXトレンチ

北東側斜面に設定した長さ約10.6mのトレンチである。地山面で2段の段をなし、各段の上面で20°、斜面で35~50°の傾斜角を測る。表土層下は暗茶褐色土が20~50cmの厚さで堆積していた。

遺構・遺物は検出されていない。

j) B区トレンチのまとめ

以上9本のトレンチの土層観察で認められた表土層下の堆積土は耕作土と思われ、B-VIIトレンチの土壌状の高まりは上方から黒褐色土が流れてきて堆積したものと思われる。B区は大部分が近世以降の畑の開墾によって地山面まで削平されていたが、上段緩斜面ではピット状落ち込みと土師片を、下段緩斜面ではSD-01を検出したので、両緩斜面は面積を拡張して発掘調査をした。

k) B区上段緩斜面(B-II、VII、VIIIトレンチ拡張区)(第10図、図版9)

上段緩斜面を全面にわたって地山面まで剥いだところ、西側を中心にピット状落ち込み39を検出した。各落ち込みは径約40~60cm、深さ15~30cmを測る。P-23、34、1、5、15、16が約60cmの間隔で同一軸上に並び、この軸にはほぼ平行にP-32、33、13、14が同一軸上に並んでいた。また、ピット状落ち込みは緩斜面の尾根筋と北西側の比較的平坦な面に集中していたことなどから逆茂木(?)などが存在したこととも考えられる。しかし、各ピット状落ち込みの様子や、検出した遺物が現代の磁器片1だけだったことなどから明確な中世の遺構とは認め難い。今後の調査例・研究例をまって判断すべきであろう。

l) B区下段緩斜面(B-I、Vトレンチ拡張区、B-X、XIトレンチ)(第11図、図版9)

下段緩斜面はSD-01を検出したB-Iトレンチの南西側の比較的平坦な面を全面発掘した。また、北東側には尾根に直交する形で幅2mのトレンチを2本設定し発掘した。

全面発掘した南西側は南東隅より北西へ幅約5m、長さ約10mの平坦面が認められ、SK-01はこの面から検出されていた。また新たに土坑を3検出した。

調査区のはば中央の南西隅、粗削りされ傾斜した地山面から古墳時代と思われる鉄製品を3(手斧、ノミ、鎌)検出した。

B-X、XIトレンチ内は傾斜角15~40°を測る斜面となっていた。

遺構などは検出されていない。遺物は北東壁面の暗茶褐色土と黒褐色土の間から現代

の瓦片 1 を検出した。

3) C 区 (第7, 9図, 図版II)

幅 2 m のトレンチを北東斜面から南西斜面にかけて 1、南西斜面に 2 設定した。

a) C-I トレンチ

北東斜面から調査区の最頂部を通り南西斜面にかけて設定した長さ約 23 m のトレンチである。

北東側は地山面で 3 段の段をなし、各段の上面で 20°、斜面で 40~50° の傾斜角を測る。表土層下は暗茶褐色土が 0.2~0.7 m の厚さで堆積していた。

遺構などは検出されていない。遺物は北東隅の地山面から近・現代の磁器片 1 を検出した。

南西側は地山面で 2 段の段をなし、各段の上面で 0~20°、斜面で 30~40° の傾斜角を測る。表土層下は頂部から 11 m 付近まで暗茶褐色土が 0.2~0.8 m の厚さで堆積し、11 m 付近からは厚さ 0.8 m 前後の暗茶褐色土の下部に黒褐色土が 0.2~1 m の厚さで堆積していた。遺構、遺物などは検出されていない。

b) C-II トレンチ

南西斜面に設定した長さ 10.7 m のトレンチである。地山面で 2 段の段をなし、段の上面で 20°、斜面で 20~40° の傾斜角を測る。表土層下は暗茶褐色土が 0.2~0.6 m の厚さで堆積していた。

遺物などは検出されていない。南端の地山面から現代の磁器片 3 を検出した。

c) C-III トレンチ

C-II トレンチに並行する形で 6 m 北東側に設定した長さ約 10 m のトレンチである。地山面で 2 段の段をなし、各段の上面で 5~20°、斜面で 15~40° の傾斜角を測る。表土層下は 1 段面に茶褐色土が 0.3 m 前後の厚さで、2 段目に暗茶褐色土が 0.2~0.8 m の厚さで堆積していた。

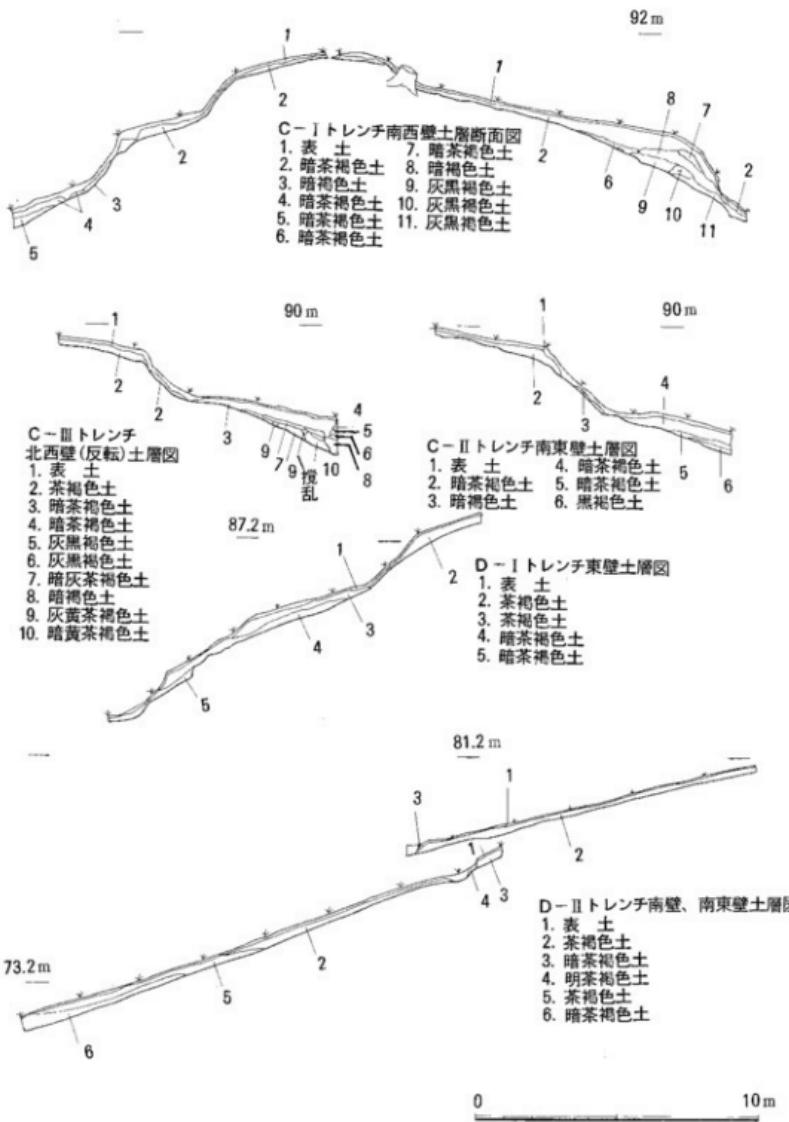
遺構などは検出されていない。西壁面の南端の暗茶褐色土層より現代の磁器片 1 を検出した。

d) C 区のまとめ

C 区も A、B 区同様地山面まで削平されており、各トレンチの暗茶褐色土は耕作土と思われる。

4) D 区 (第7, 9図)

幅 2 m のトレンチを北東斜面から北東へ延びる舌状の尾根上に 2 本設定した。



第9図 C区、D区土層図

a) D-I トレンチ

C区に隣接する北東斜面に設定した長さ約14.2mのトレンチである。地山面で2段の段をなし、各段の上面で20~30°、斜面で50~60°の傾斜角を測る。表土層下は暗茶褐色土が0.2~0.5mの厚さで堆積していた。

遺構などは検出されていない。遺物は近世、近代と思われる磁器片2を表面採集した。

b) D-II トレンチ

北東斜面から延びる舌状の尾根上に「く」の字に設定した長さ約16.7mのトレンチである。地山面は傾斜角10~20°を測る緩斜面となっていた。表土層下は暗茶褐色土が0.2~0.6mの厚さで堆積していた。

遺構、遺物などは検出されていない。

c) D区全体のまとめ

D区も畠の間整で地山面まで削平されていた。

3. 遺 構

1) A区(図省略)

SD-02は、検出面で長さ約1m、幅約0.9m、深さ約0.2mを測る。かなり削平されており性格は不明である。

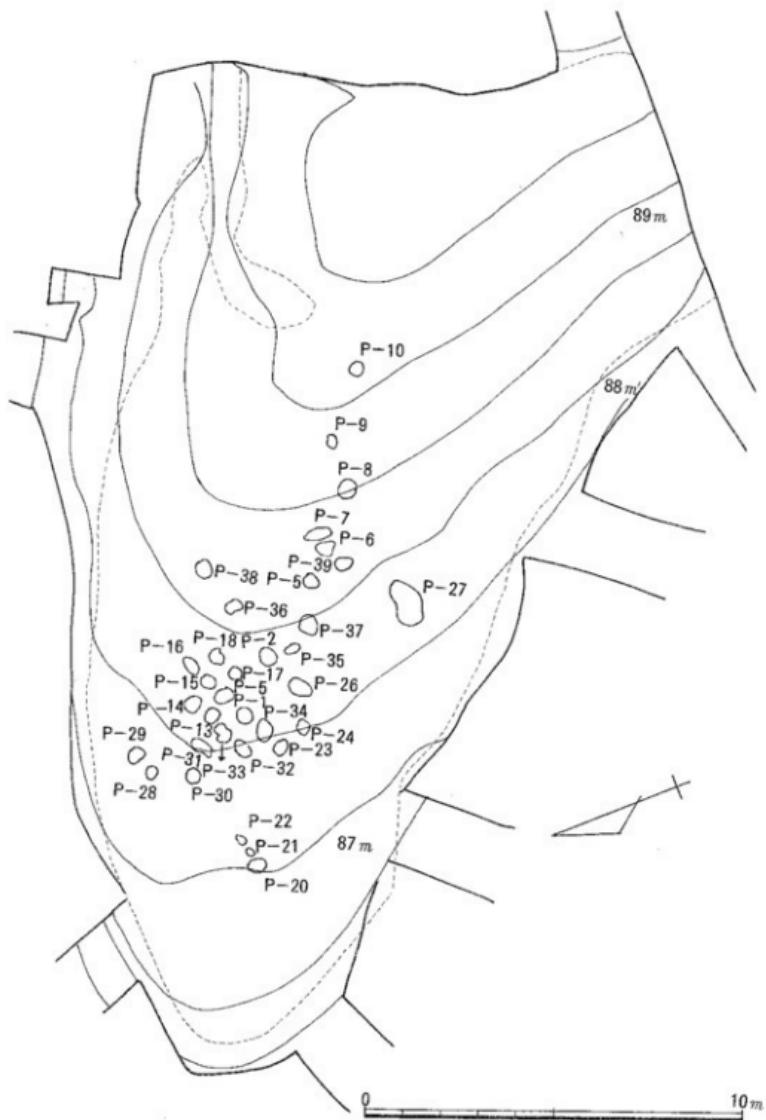
2) B区(第11図)

SD-01は、検出面で長さ約2m、幅約0.7m、深さ約0.3mを測る。埋土は3層に分かれるが、3層とも自然の流入土と考えられる。第1層から土師質土器が検出されている。SD-01の西側で検出された鉄製品は古墳時代のものである可能性が高いこと、SK-01、02で土師器片が検出されていることなどからこの溝は古墳時代に掘られたものと考えることもできる。

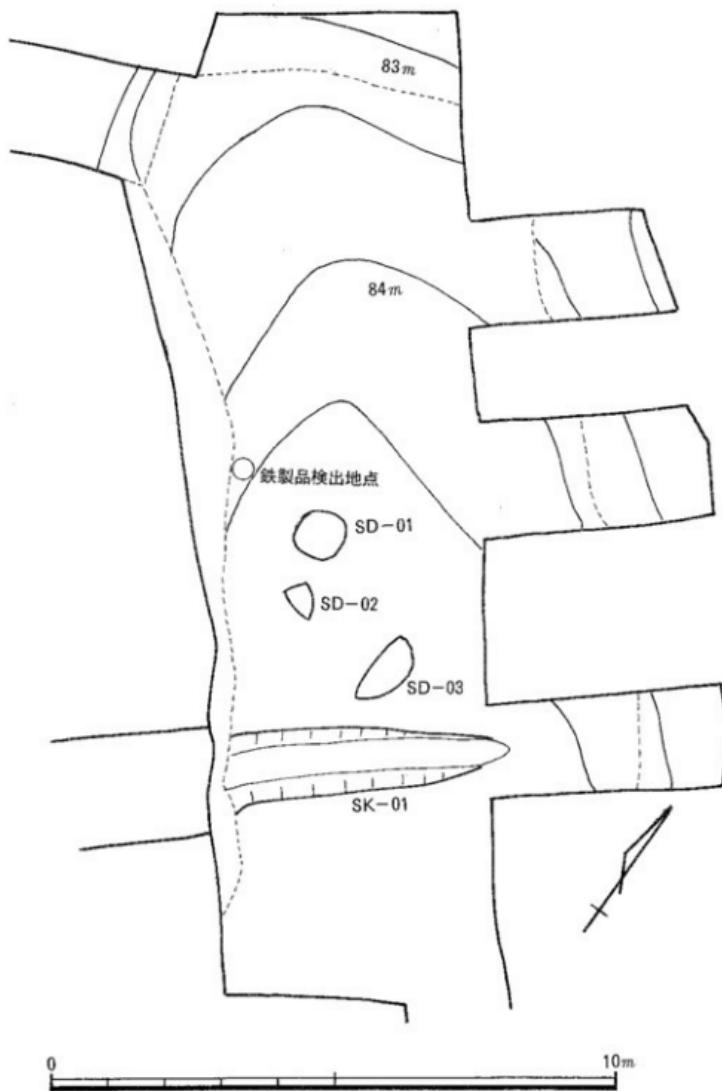
SK-01は、検出面で径約0.95m、深さ約0.25mを測る。埋土は4層に分かれるが自然の流入土と考えられる。第一層から古墳時代のものと考えられる土師器片1を検出した。

SK-02は、検出面で長径約0.75m、短径約0.45m、深さ約0.25mを測る。埋土は3層に分かれるが自然の流入土と考えられる。第一層から古墳時代のものと考えられる土師器片1を検出した。

SK-03は、検出面で長径約1.4m、短径約0.67m、深さ0.25mを測る。埋土は2層に分かれるが自然の流入土と考えられる。埋土は黒茶褐色土だったSK-01、02と異なり白色であり、遺物なども検出されなかったことなどからこの土坑の穿たれた時期は不明である。



第10図 B区上段縦斜面測量図



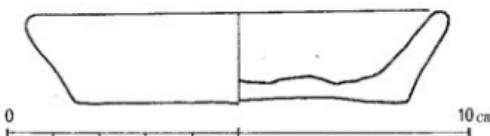
第11図 B区下段緩斜面測量図

4. 遺物

実測可能な遺物は土師質土器、鉄製品、瓦片、墓石、砥石などがあるが、瓦片、墓石、砥石は実測図を省略した。

1) 土師質土器（第12図、図版12）

SD-01内から検出した口径9.2cm、器高2cmを測る浅い小皿である。底部は薄く、口縁部はやや厚くなり、見込み中央がわずかに凹む、胎土は砂粒を多く含む。口縁部は回転ナタ調整を施し、底部裏面はやや風化しているが静止糸切りと思われる。燈明皿の可能性もある。製作時期は川原和人、桑原真治両氏の編年に照らしてみると、IV期のものにプロポーションや調整が似ているが、底部の器壁が薄くなっている。IV期あるいはそれに続く時期のものと思われる。また類似した小皿が三刀屋城跡天神郭Pより出土していることなどから15~16世紀のものと思われる。



第12図 土師質土器実測図

2) 鉄製品（第13図、図版12）

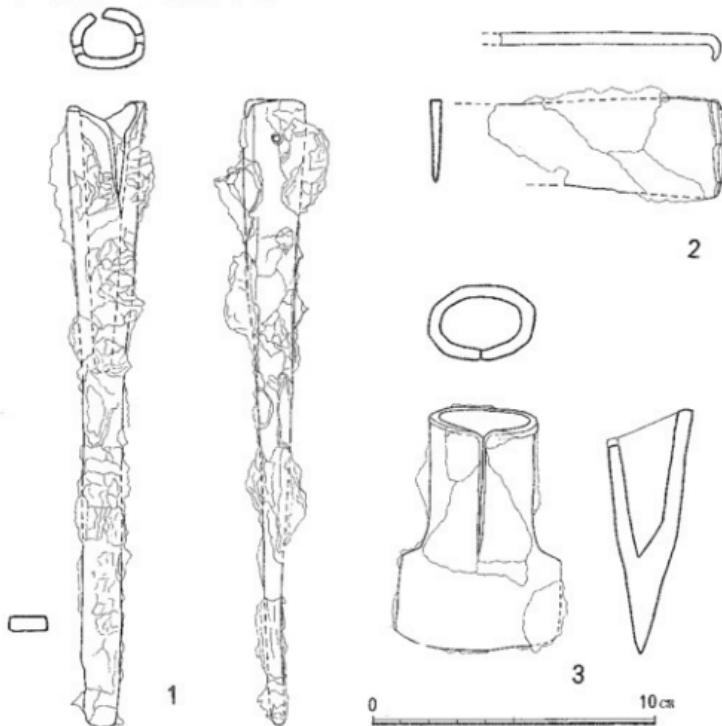
手斧とノミは遺存状態が良好で、ほぼ原形を保っていた。鎌は基部のみ残存していた。ノミ（第13図1）は、長さ22.3cm、幅は鉄身部で1.4cm、基部で2.7cm、厚さは鉄身部で0.6cmを測る突きノミで鍛造品である。鉄身部は方柱状を呈し、両刃をもつ。基部は鉄板の折り曲げによって袋状となるが、両端は密着せず、V字状のすき間となっている。また、基部には0.4cmの穴が1対に穿たれている。手斧同様刃こぼれがあり使用したと思われる。

鎌（第13図2）は、残存長8.2cm、最大幅3.7cm、肩部の厚さ0.4cmを測る鍛造品である。柄を固定するため基端を折り曲げている。直刃であるのか曲刃であるのかは不明である。

手斧（第13図3）は、長さ8.7cm、幅は刃部で5.8cm、基部で3.9cmを測る鍛造品である。刃部は刃先がやや彎曲し有刃となり、基部は袋状となり、両側からの折り返しの両端が密着し完全な袋となっている。刃こぼれがあり使用したと思われる。

これら3点の鉄製品の時期は、形態からみると古墳時代から中世末頃まであったと思われるので明確にすることはできない。しかし、遺跡のある丘陵が松本古墳群の築かれた丘陵と三刀屋川をはさんで対峙し、比高もほぼ同じであること。古墳時代前・中期には鉄製農具・工具が盛んに古墳に副葬されたこと。かつて砦跡周辺から古鏡や勾玉が出

土していることなどから、この丘陵上にはかつて古墳が築かれ、これら3点の鉄製品はその副葬品だった可能性がある。



第13図 B区下段緩斜面検出鉄製品実測図

5. まとめ

本遺跡は、形状やその立地により中世の砦跡と考えられたが、後世の畑作等で遺構が損われ充分に残されていない可能性もあった。そこで、調査は前述のように対象区域の詳細な地形測量図を作成するとともに、トレンチなどによる部分的な発掘を行い、必要に応じて調査面積を拡張するという方法をとった。

地形測量の結果、(1)各平坦面は先端部にむかってかなり傾斜していること、(2)各平坦面は全体に不規則な配置、形状となっていること、(3)明らかな掘り切りや土塁などがないこと、(4)南西側崖面は県道建設の際に大きく削りとられていることなどが明らかになった。

発掘の結果をみると、主な検出遺構には溝2、土塹3がある。B区及びC区の斜面や

D区に設定したトレンチでは段状遺構を検出したが、いずれも出土遺物、堆積土層から近・現代のものと判断された。

B区下段緩斜面のSD-01は平坦面を横断（尾根に対して直角方向に）する形で検出され、溝内第一層から土師質土器が出土した。SK-01、SK-02が古墳時代のものである可能性もあることから、SD-01は古墳時代に掘られ、後に中世の土師質土器が流入したとも解釈できることは前述のとおりである。

A-VI区のSD-02は浅いもので、西側は消滅している。溝の肩にあたる部分から、近・現代の陶器、瓦片が出土している。

B区上段緩斜面のピット状落ち込み群は、中世の遺構とは断定しにくく、その性格が不明である点も前述のとおりである。

丘陵全体を覆っている堆積土は単純で、表土層とその下の暗茶褐色土層の2層が主体をなしている。斜面と平坦部端で幾層かに分かれるところもあり、部分的には盛土とみられるところもある。

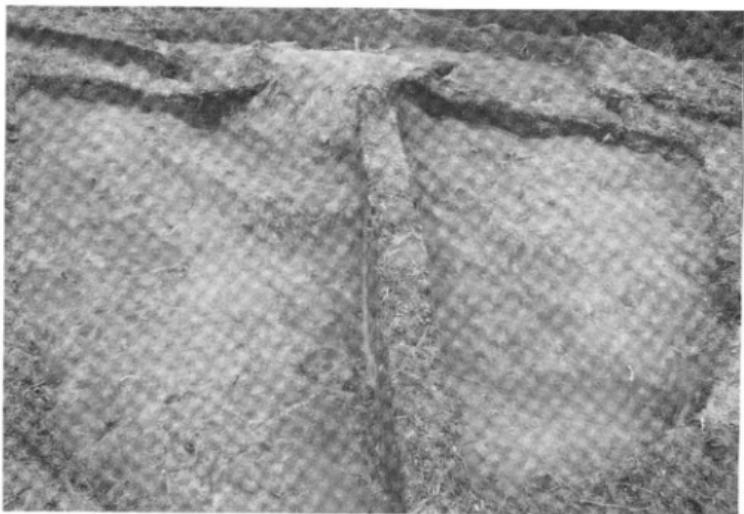
『雲陽軍実記』、『陰徳太平記』の記事が史実であるとすれば、大内義隆が陣をすえた地点、合戦の行われた地点が問題となろう。義隆父子は、これから寒くなろうとしている時期にかなりの期間滞在したようである。尾根上はせまいに風あたりが強く、大軍を率いて滞在するには不適当であったと思われる。見張り所的なものを丘陵頂部に設け、本隊は平野部に駐屯したとも考えられる。

B区下段緩斜面で中世の土師質土器が出土していることから、本遺跡は中世に何らかの形で使われていたものと考えられる。地王峠は、三刀屋から富田方面へ至る道の出入口にあたり、また出雲と山陽を結ぶ重要な街道に面する交通の要衝である。さらに古墳時代の遺構が残されていることと、その上の堆積土層や遺物の出土状況から、中世にはあまり大きな土木工事は行われなかったように思われる。また、各平坦面の間に存在する崖は、近世以降の切土・盛土によるものと考えられる。

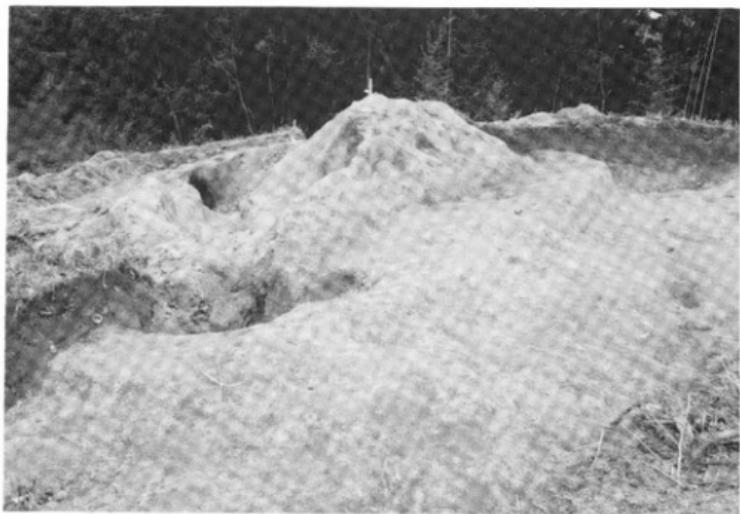
三刀屋町内には、本遺跡と似かよった地形の特徴を示すところがかなりあり、物見曲輪的な跡として考えられている。即断は禁物であるが、立地等をみると、この説には傾聴に値するものがある。今後、より一層広範な視野に立脚した城跡調査・研究が進められることを期待する。

主要参考文献

- 川原和人・桑原真治「鳥根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」『古文化談叢』第18集 1987
『三刀屋城跡調査報告書』・III・三刀屋町教育委員会 1984
村松貞次郎『大工道具の歴史』岩波新書 1973

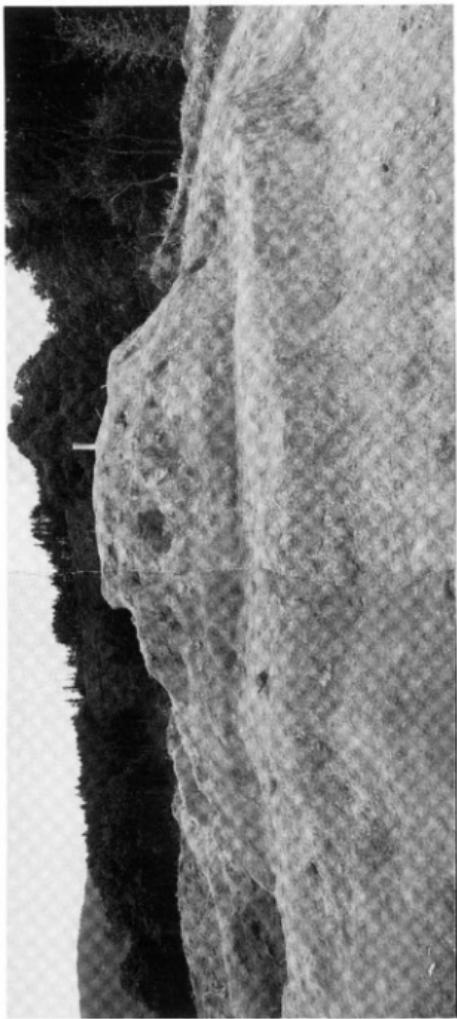


要害の首塚（南から）



要害の首塚完掘状況（西から）

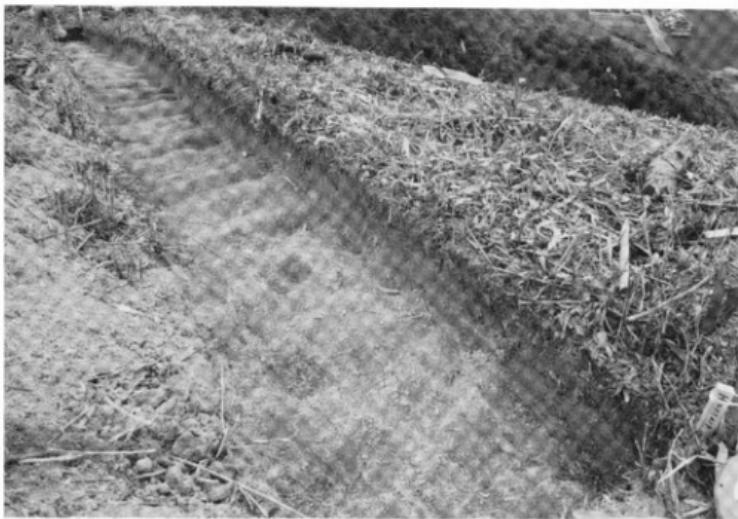
図版 2



要害の首塚完掘状況（南西から）



首塚から地王砦跡への尾根



№3 杭付近トレンチ

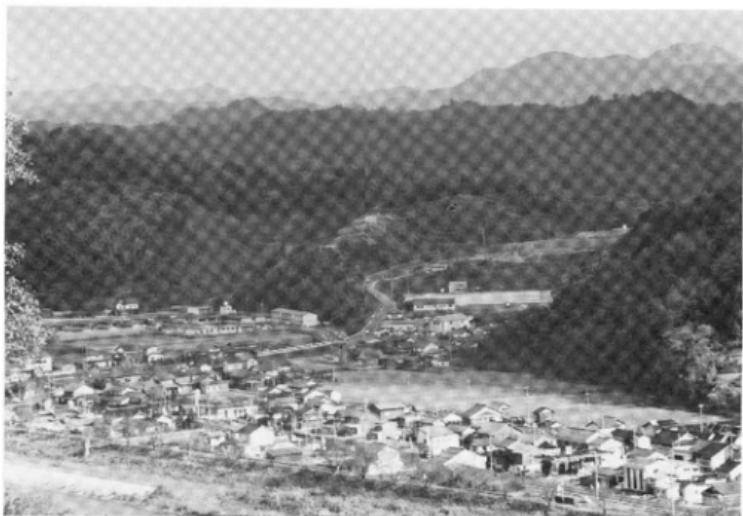
図版 4



地王砦跡 E トレンチ



地王砦跡発掘風景



地王砦跡遠景（尾崎城跡より）



地王砦跡遠景（手前の丘陵上に松本 1 号墳がある 北より）

図版 6



地王砦跡近景（南より）



地王砦跡近景（南東より）



地王砦跡より尾崎城跡（中央）とじや山城跡（右奥）を望む



A 調査区（南東より）

図版 8



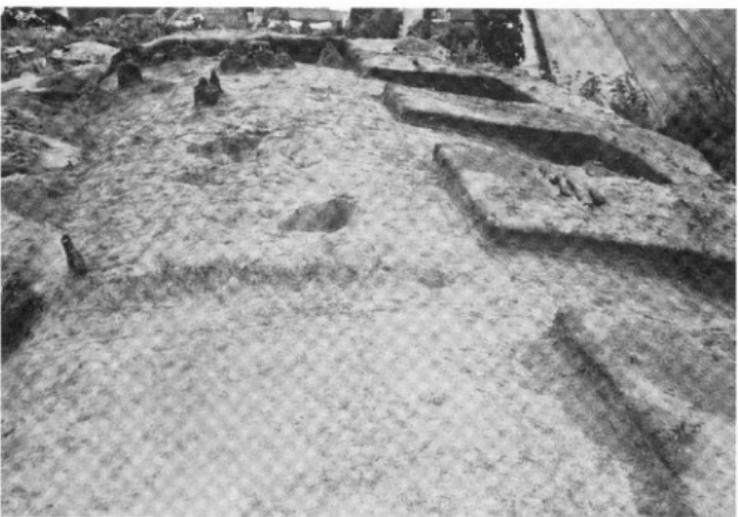
調査指導風景



D 調査区

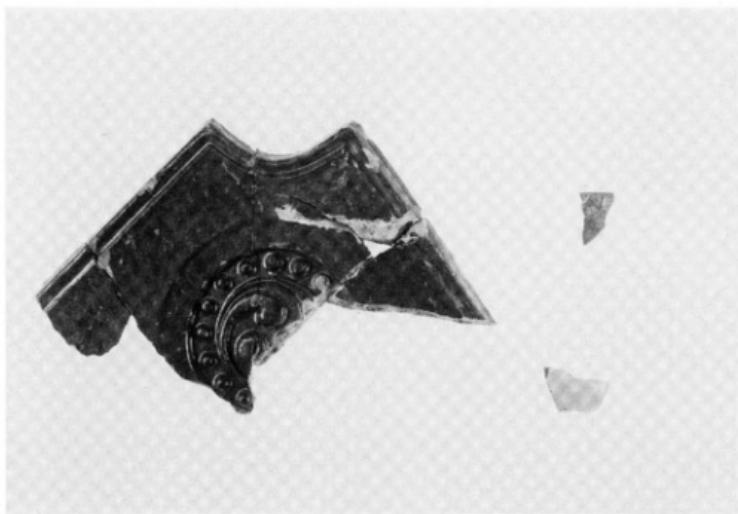


B区上段缓斜面完掘状况

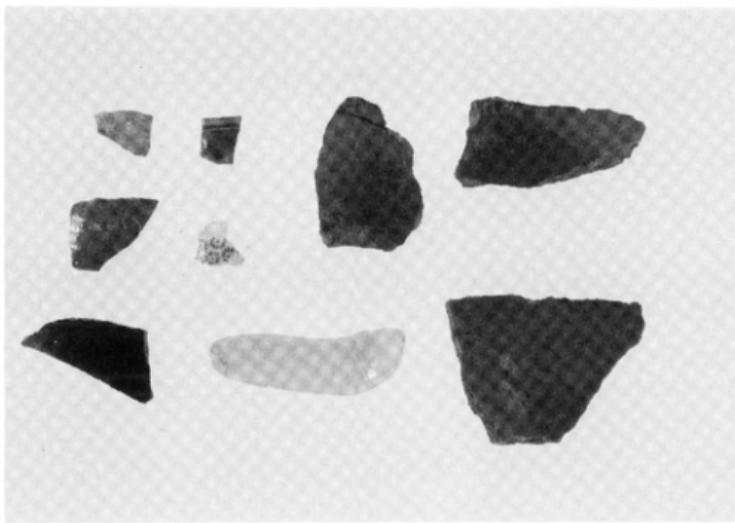


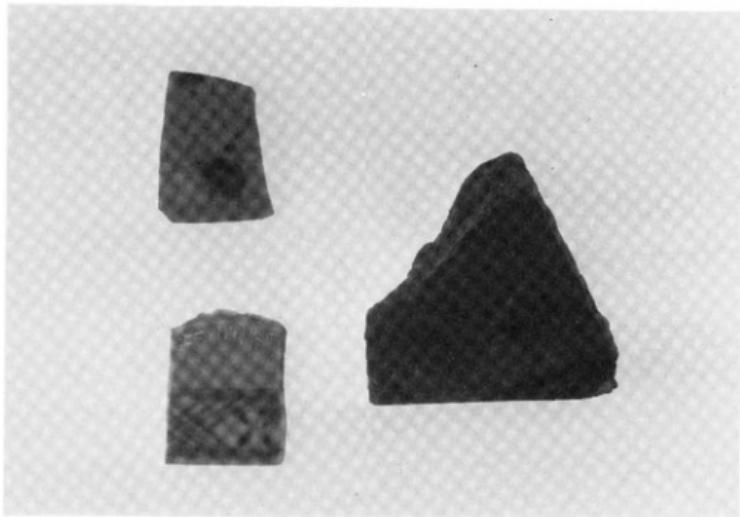
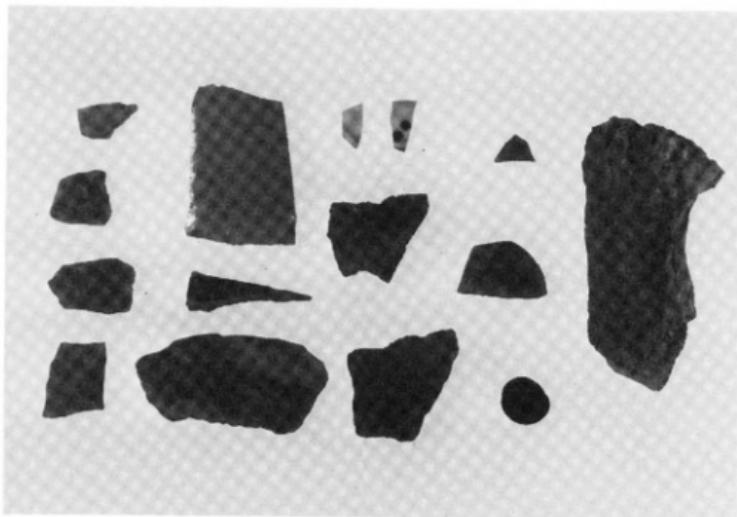
B区下段缓斜面完掘状况

图版 10



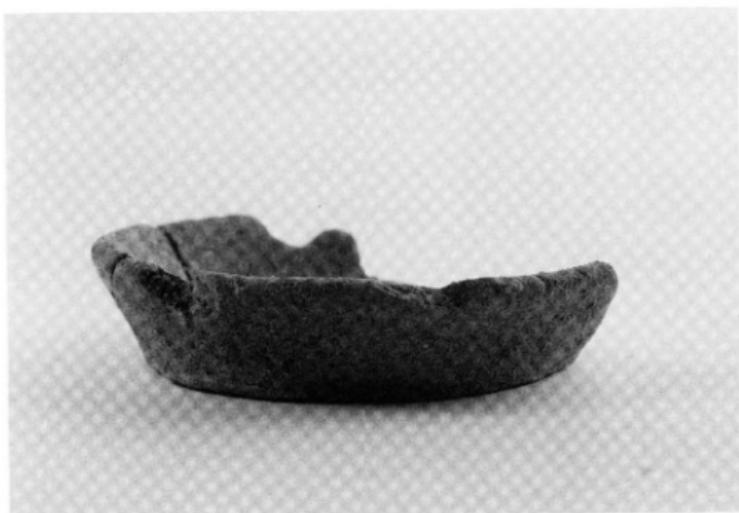
A区出土遗物



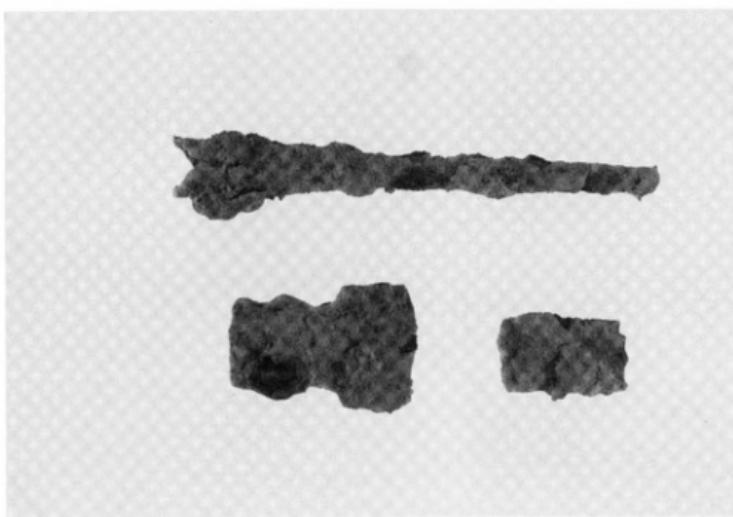


D区出土遺物

図版 12



SD-01 検出 土師質土器



鉄製品 (1. 鎌 2. 手斧 3. ノミ)

要害の首塚・地王砦跡
発掘調査報告書

1989年3月

発行 三刀屋町教育委員会
島根県飯石郡三刀屋町三刀屋

印刷 印木次 印刷
島根県飯石郡三刀屋町三刀屋

